

綜合郷土研究所 2025 年度春季企画展

近世の本 —尾張と三河の書林—

今年の大河ドラマは鳴門重三郎の物語を通して、私たちにとって身近な存在である本の出版を中心に、今に継ぐ江戸時代の文化的な様相が描かれています。ドラマの主な舞台は江戸ですが、出版文化は都市部の江戸・京都・大坂にとどまらず、各地域でさまざまな書物が流通し、人々は本に親しんでいました。それら当時の書物は数百年の時を経て、現在も「古典籍」などの名称で、古書店などでお目にかかることができます。

愛知大学では綜合郷土研究所および図書館にて、さまざまな古典籍を所蔵しています。改めて収蔵品を見直すと、尾張・三河にまつわる人々が出版した書籍が数多くあり、歴代の担当者によって連綿と収集されていたことが再認識されました。これらをぜひとも多くの方にご紹介したいと企画展「近世の本—尾張と三河の書林—」を開催しました。

【凡例】

- ・この図録は綜合郷土研究所主催 2025 年度春季企画展「近世の本—尾張と三河の書林—」で紹介した書籍やパネル等を抜粋・再構成し、新たな知見も加え、web サイト上で公開するものです。展覧会開催時に印刷物の発行はしておりません。
 - ・本展の実行委員および図録執筆委員は以下のとおりです（五十音順）。
- 荒木亮子（郷土研研究員） 神谷智（本学文学部教授） 田中博久（郷土研研究員）
橋敏夫（本学非常勤講師） 早川駿治（郷土研臨時職員：当時）



愛知大学
AICHI UNIVERSITY

綜合郷土研究所
Community Research Institute

名古屋の書林

江戸時代中期以降、個人間で売買する私家版を除いて、書物を出版・流通させるには、三都（江戸・大坂・京都）書林仲間の許可が必要でした。御三家の尾張藩であっても例外ではなく、尾張の書林が出版販売する本の多くは、三都書林の出版物や、三都との合同出版物でした。寛政6年（1794）になると、尾張の書林たちは、この三都書林の支配から脱却し、藩とともに独自板行の権利獲得に向けた開板運動をはじめました。当時尾張藩は、藩校明倫堂の設置など学問振興を奨めており、藩校の教授たちの著作出版という点でも好都合であったため、協力して運動を展開したと考えられています。当然、三都書林仲間はこれに反発・対抗しましたが、まもなく認められ、時を経ずして名古屋でも書林仲間が結成され、書林の数も増加し、出版文化が花開いていきます。以下、主だった書林とそこが出版や販売に関わった書籍を紹介します。

1 風月堂孫助

出版・古本・貸本・製墨／名古屋本町1丁目

古くからある名古屋の書林。当初は古本専業で、正徳4年（1714）頃から出版活動をはじめた。岡田新川・横井也有・松平君山・秦鼎など尾張藩士の著述の出版を数多く手掛ける。貞享4年（1687）に松尾芭蕉が立ち寄ったことで有名。



『新川先生夢游篇』 発行：風月孫助ほか

明和8年（1771）刊。尾張藩の儒者岡田新川（おかだしんせん）の紀行漢詩集。序文は松平秀雲（尾張藩士、儒者）・西河翼（新川の門人）ほか。尾張での開板が認められていない時期の本。見返しに「風月堂梓」とある。

総合郷土研究所蔵



『本朝 政家憲法本紀』（内題：五憲法）

蔵板：応夢山定光禪寺
発行：風月堂・玉苞堂

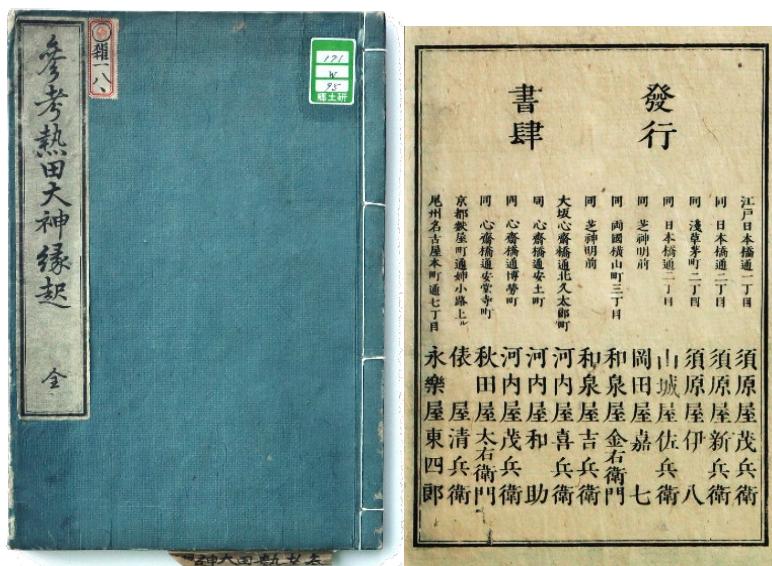
寛政9年（1797）刊。『先代旧事本紀大成経』の「憲法本紀」を抜き出したもの。『旧事大成経』は『国史大辞典』によれば『先代旧事本紀』を模し、聖徳太子撰と詐称した神儒仏一致に立つ神道書。

総合郷土研究所蔵

2 永楽屋東四郎(片野東四郎・東壁堂)

出版・吉本・製墨・製薬／名古屋本町4丁目のち7丁目

尾張最大で全国的にも名の知られる書林。創業は安永期と考えられている。初代は風月堂孫助と同じく尾張藩士の著作を数多く手掛けた。尾州書林は、三都からの独立によってしばらくの間、三都での販売禁止など妨害をうけたが、東四郎はそれを見越してか、江戸の鳶屋重三郎と提携、共同出版をはじめおり、これが江戸での販売を可能にし、困難を乗り越えた。鳶屋にとってもこの提携は好都合で、それまでもっぱら絵本、錦絵、稽古本、往来物などを手掛けてきたが、(永楽屋が得意とする)硬派な書籍出版に乗り出すことができた。こうして初代がその基礎を築き、2代目はさらに永楽屋を大店にのしあげた。出版本の分野も、儒書、国学、医書などから、手習い・囲碁・将棋本など、さらに葛飾北斎の『北斎漫画』に代表される絵本類へと領域を広げた。大垣そして江戸への出店、江戸書物問屋への加入を果たしたのである。



『参考熱田大神縁起』

発行：永楽屋東四郎含め 13軒

明和6年(1769)に、熱田の国学者で師の伊藤信民と子息の子訓が、熱田神宮最古の縁起書『尾張國熱田大神宮縁起』に注解を付し纏めた。さらにその後、文化8年(1811)に尾張藩の儒者・秦鼎が頭注を施したもの。

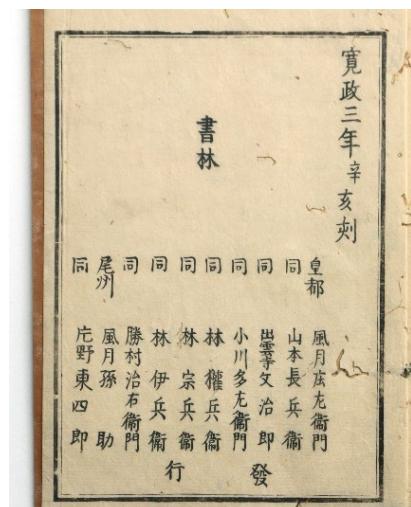
総合郷土研究所蔵



『傷寒論特解』 発行：片野東四郎(永楽屋) 含め 10軒

寛政3年(1791)刊。『傷寒論』から真偽を選別し、103章を抽出した注釈書。江戸中期の儒学者斎静齋とその門弟による遺稿『傷寒論微辞弁』に尾張の浅野元甫が補注を加えたもの。

総合郷土研究所蔵 榎本家文書



傷寒論の注釈書と和漢医学の萌芽

『傷寒論』は『傷寒雜病論』(張仲景〔150~191年〕著)から急性熱病の項目を抄録した医学書です。あらゆる事象を陰と陽のグラデーションで捉える陰陽論と組み合わせ、病を6段階に分類し症状や脈の特徴などから深行度を推し測り治療方針を定めました。そこに記された原則は後世にも影響を与え、現在も日本の漢方薬処方の基礎的書物と位置付けられています。

原典は古くに散逸したものの、晋の王叔和(生没年不詳)をはじめ多くの医家たちが、遺された断簡から数々の書物を編纂しました。江戸時代の日本でも数多くの注釈書が世に出され、本展出陳の『傷寒論特解』では過去の編纂物を玉石混交と手厳しく評価しました。

それは裏を返せば、多くの人々が『傷寒論』を利用し、試行錯誤を繰り返した証でもあります。近世の出版文化を通じて、過去の膨大な経験知の積み重ねと再検証が加速したこと、模倣していた中国の医学から日本独自の和漢医学が芽生えたといえるでしょう。

(田中)



『鈴林必携』 蔵板：田原藩 発行：永楽屋東四郎含め12軒

『Militair Zakboekje』を抄訳した砲術書。メートル法による計量単位を知る上で、幕末の砲術家の間で必須の教科書であったという。例言では、田原藩士の上田亮章(喜作)が翻訳したことになっているが、実際には主君 三宅友信による翻訳である。友信は隠居の身であることを憚って、側近の上田の名を借りたものと考えられている。なお、例言は友信の筆跡だという。

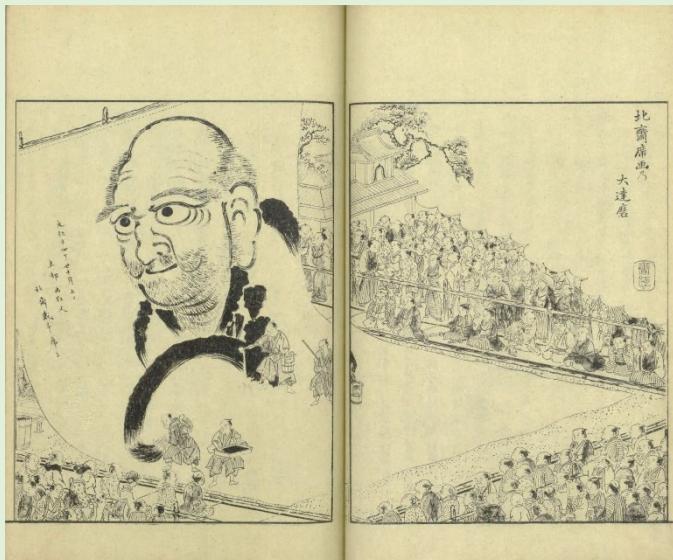
綜合郷土研究所蔵

三宅友信

田原藩主三宅康友の四男。文政10年(1827)に兄の藩主康明が病死、当時23歳の友信が継ぐべき立場にあったが、藩財政の窮乏のため、姫路藩酒井雅楽頭忠実の子(のちの康直)が持参金つきで急養子となり藩主となった。若くして隠居格となった友信は、側用人の華山に導かれ、学問に自らの生きる道を求めた。隠居料の多くを書物購入につぎこみ、鈴木春山・高野長英らを雇い洋書の翻訳をさせ、自らも蘭書の解読に励んだ。蛮社の獄により華山が田原に蟄居させられると、友信も三河にもどり、彼の身辺を見守るも華山は自刃する。その後は一層蘭学に情熱を注ぎ、春山や村上範致、上田喜作(亮章)とともに西洋銃陣や砲術の導入に力を入れ、自身で蘭書翻訳に取り組んだ。明治19年(1886)没。

北斎と名古屋

『富嶽三十六景』で有名な葛飾北斎は2度来名しています。1度目は文化9年(1812)秋のこと で、半年ほど滞在しました。このとき尾張藩士で絵師の 牧墨僊 (まきぼくせん) の家に逗留し、300点余りの絵を描いたそうです。それらを1冊の本にしたのが『北斎漫画』で、出版したのは永 楽屋東四郎です。その後、続編も出され、長く人気を博しました。2度目は、文化14年(1817) 秋で、このとき北斎は 120畳の大きな紙に即興でだるまを描くという一大パフォーマンスをおこ ないました。興行場所の西掛所(本願寺名古屋別院)には見物の群衆や門外に出されたさまざまな 屋台で大賑わいでした。この興行は高力猿猴庵の『北斎大画即書細図』や『尾張名所図会 附録 小 治田之清水』(小田切春江画)に記録されています。



北斎の大だるま席画興行の様子

文化14年(1817)10月5日に、葛飾北斎が開催した大だるま絵を即興で描くという興行の様子を小田切春江が『尾張名所図会 附録 小治田之清水』巻一に描いた。本書は昭和55年の復刻版。

総合郷土研究所蔵



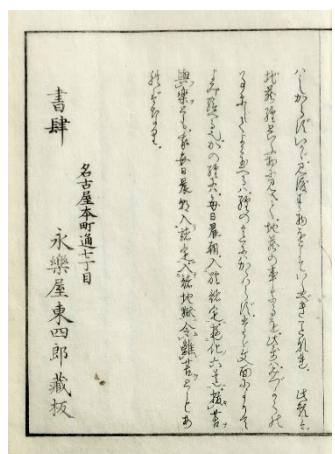
『北斎漫画』十編 発行：永楽屋東四郎

葛飾北斎による全15編からなる絵手本集の1冊。文化9年(1812)に北斎が名古屋滞在中に描いた絵を永楽屋が初編を出版し、その後、明治11年(1878)北斎没後まで続編が出版されたという人気ロングセラー作品。十編には小野小町や武蔵坊弁慶、老子などの歴史上の人物から、幽霊、妖怪、風景などさまざまな画が収録される。

総合郷土研究所蔵

永楽屋東四郎と本居宣長

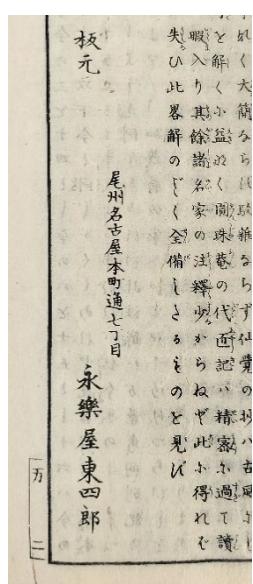
尾張の独自開板が認められて以降、永楽屋東四郎は、伊勢松坂の国学者・本居宣長の著作出版を数多く手がけました。文政5年(1822)の永楽屋の出版目録では『古事記伝』をはじめ、『古今集速鏡』『直毘鑑』など22種を確認できます。35年の歳月をかけた大著『古事記伝』(全44巻)は、宣長の国学理念を反映させた政治を目指した尾張藩の重臣・横井千秋(宣長門人)が天明年間に刊行を計画し、永楽屋と風月堂孫助が製本を引き受けました。寛政9年(1797)までに17巻が刊行され、享和元年(1801)に宣長が没した後も継続し、文政5年(1822)に完結しました。永楽屋は宣長だけでなく鈴屋門人の著作出版にも携わりました。永楽屋では明治に至るまで、神棚で宣長を祀ったという逸話もあり、その利益の大きさを物語っています。明治34年(1901)には、本居家が「鈴屋」保存資金獲得のため、永楽屋に宣長著作の板木を数多く譲渡しました。この話からも両者には厚い信頼関係が築かれていたことが窺えます。



『美濃酒家』 蔵板: 永楽屋 発行: 永楽屋東四郎含め 8 軒

本居宣長による『新古今和歌集』の注釈書。和歌 696 首を選んで文法的に注釈し、新注の先駆けとなったもの。寛政 3 年（1791）成立、同 7 年刊。 総合郷土研究所蔵

綜合鄉土研究所藏



『尾張酒家草』 蔵板：永楽屋東四郎 発行：永楽屋東四郎含め 8軒

本居宣長による『新古今和歌集』の注釈書。和歌 696 首を選んで文法的に注釈し、新注の先駆けとなったもの。寛政 3 年（1791）成立、同 7 年（1795）刊。

綜合鄉土研究所藏



『くず花』 発行：永楽屋東四郎

本居宣長著。安永 9 年 (1780) 9 月～11 月頃成立。宣長没後に弟子の市岡孟彦が刊行。自著「道云事之論 (古道論)」(『直毘靈』草稿) を批判した、儒学者市川匡麿の『まがのひれ』に対する反論書。書名に「クズの花」は二日酔いによく効き、悪酔いも防ぐ効果がある。儒学 (という毒酒) に酔いしれた人を覚醒させるという意味を書名に込めた。末尾に東壁堂製本略目録がある。

総合郷土研究所蔵



『まがのひれ』 発行：永楽屋東四郎

市川匡麿著。安永 9 年 (1780) 4 月。本居宣長の著「道云事之論 (古道論)」(『直毘靈』草稿) を批判したもの。「まがのひれ」というタイトルは「禍心」と「領巾」からきている。『古事記』に載る伝説は、後世の為政者がまとめたものと捉え、それを信奉した「禍心」に支配された人々を領巾により祓い清めてはどうか、という意味が込められている。当時名古屋に居住していた市川匡麿は、この書を交流のあった田中道麿 (美濃の国学者) を通して、宣長へ送った。この書を読んだ宣長は、すぐさま反論書『くず花』を著した。

総合郷土研究所蔵



『出雲國造神壽後釋』 発行：永楽屋東四郎含め 13 軒

本居宣長による『延喜式』中の「出雲国造神賀詞」の注釈書。これより前に賀茂真淵が出版した『祝詞考』(『延喜式』の祝詞の全注釈書) に対して、宣長の説 (後釋) を述べたもの。

総合郷土研究所蔵

3 万屋東平(慶雲堂)

出版・古本・貸本／名古屋本町11丁目

永楽屋東四郎店初代からの別家(独立)といわれる。



『雅言仮字格同拾遺』

蔵板：槲園社
製本：萬屋東平

著者は尾張藩士で国学者の市岡猛彦、序は愛知郡成海神社神主牧野保秀。巻末に「尾張槲園社中蔵板」とある。槲園は市岡猛彦の号。

綜合鄉土研究所藏



『神代記葦牙』

発行：万屋東平含め 12軒

文化7年(1810)序。遠江の国学者栗田土満著。日本書紀の中神代卷の注釈書。本居大平の序文と評註あり。

綜合鄉土研究所藏



『写真学筆 墨懶叢画』

牧墨僊（まきぼくせん）による人物尽くしの絵本。墨僊は尾張藩士で絵師。江戸詰めのころに喜多川歌麿に絵を学び、文化9年（1812）に葛飾北斎が来名したおり門人となったという。木版画だけでなく銅版画家としても名高い。月光亭、北亭などとも号す。序文は文化12年（1815）で尾張藩士神野世猷による。 総合郷土研究所蔵

綜合鄉土研究所藏



『尾張英傑画伝』 発行：美濃屋清七

嘉永5年（1852）序。編輯および画は小田切春江。豊臣秀吉、源頼朝、織田信長、建稲種命、前田利家、道場法師、木下長嘯子、蜂須賀正勝など18人を取り上げている。
綜合郷土研究所蔵

小田切春江

江戸時代後期から明治時代にかけて、風俗記録画や地図を数多く描いたことで有名な絵師。その代表的な業績に、尾張の名所の景観やその土地の風俗を描いた『尾張名所図会』の挿絵が挙げられる。文化7年（1810）生まれの尾張藩士（禄高100石）で、藩の仕事でも絵図制作に携わっていた。現地調査や書物収集など、自身でさまざま調べていた様子も窺え、古代の文様を集成した著作なども残している。明治21年（1888）、79歳で亡くなった。
(早川)



『徳本上人勸誠聞書』 発行：美濃屋清七・藤屋宗助・井澤屋和助・菱屋金兵衛

文政3年（1820）刊。徳本上人（1758～1818）は江戸時代中期の「木食僧」。全国を行脚し、ひたすら「南無阿弥陀仏」と念佛を唱え、人々を救ったという人物。
綜合郷土研究所蔵

5 美濃屋伊六(静觀堂)

出版・古本・貸本・書画・薬／名古屋京町 → 本町6丁目 → 鉄炮町

初代は米屋の傍ら貸本を行商し、2代目が京都風月庄左衛門で修行し、出版業をはじめる。松本奎堂の私塾と筋向いであったので、奎堂は静觀堂へよく出入した。



『四編之綴足』後編上下

発行：美濃屋伊六・永楽屋東四郎・松屋善兵衛

東花元成著。十返舎一九の『東海道中膝栗毛』の補作。一九の『膝栗毛 四編』で、弥次・喜多が、宮からそのまま七里ノ渡で桑名へ行ってしまったことを残念に思った東花が二人に名古屋見物させる滑稽噺を書き上げた。挿絵は牧墨巻。前後編4冊からなる。

愛知大学図書館所蔵

名古屋ことばに注目

○名古屋言葉の **デヤ** は、江戸の **ダ**、上方の **ジャ** といふにひとし。 **デヤ**とはなしてよむべからず。 **デヤ**と続てよむべし。又、宮駅の詞 **ハ名古屋とハ いさゝ**か違ひぬれば、あらまし書分ちぬ

これは『四編の綴足』の凡例です。名古屋では武士が使う武家ことば、城下町に住む大商人が使う上町ことば、庶民が使う下町ことば、そして周辺の農村で使う農村ことばがありました。作者の東花は江戸の人なので、名古屋でしばらく生活するなかで、こうした言葉の微妙な違いを感じ取ったのでしょうか。「おまえ」という言葉ひとつとっても「おまい」「おまゑ」「おまへ」とさまざまに表現し、農村の人のセリフは「おまや」と記しています。



『柳川画帖』

発行：美濃屋伊六・美濃屋文治郎

柳川重信の画帖。初代重信（1787～1832）は葛飾北斎の門人で娘婿。滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』の挿絵を担当したことで有名。本書は序文・跋文等がなく、年代比定ができないため2代目重信の可能性もある。

総合郷土研究所蔵



『復讐鬼娘伝』

発行：美濃屋伊六ほか

栗杖亭鬼卵著。文化14年（1817）刊。外題は「絵本鬼娘伝」。鬼卵も絵を嗜むが、この本の挿絵は尾張の北堂墨山という絵師。ただしこの人は葛飾北斎の門人で江戸の人とする文献もある。

総合郷土研究所蔵

栗杖亭鬼卵 りつじょうていきらん 延享元年（1744）～文政6年（1823）

栗杖亭の号は、上方狂歌の中興・由縁斎貞柳の高弟栗柯亭木端に学んだことによる。鬼卵の活動は、安永3年（1774）に河内国茨田郡佐太村の天満宮に俳諧句集『佐太のわたり』を奉納したことからはじまる。同書の序文には、画業をよくし、連歌・狂歌・俳諧を嗜んだ、とある。安永8年（1779）春、妻の夜燕を伴い三河国吉田の元鍛冶町に来住した。俳諧の古市木栄と親交を重ねる一方、狂歌では、天明4年（1784）に狂歌帖『牟賀志濃勢幾（昔の関）』に評点を付し、吉田の狂歌を指導した。しかし夜燕が天明2年（1782）に亡くなったことから、吉田を離れて駿河・伊豆を転々とした。それでも寛政11年（1797）に『俱毛井濃賀里（雲居の雁）』、享和元年（1801）に『代波井保志（夜這い星）』と指導を続けた。この間の寛政9年（1797）『東海道名所図絵』に「三州吉田天王祭」（巻三）、「正月六日三嶋祭」（巻五）に挿画を提供した。享和3年（1803）には著作のなかで最も知られた『東海道人物志』を刊行。晩年は画業と煙草商「きらんや（木蘭屋）」を営み、『復讐鬼娘伝』等の読本を多作した。

（橘）



夜燕の墓の拓本。墓は豊橋魚町の妙円寺墓地に現存。

（拓本出典：『豊橋市図書館所蔵拓本資料集 豊田珍比古氏旧蔵資料』）



大須賀（栗杖亭）鬼卵『東海道人物志』（復刻版）

総合郷土研究所蔵



7 藤屋吉兵衛(富梁堂)

出版／名古屋 本町4丁目→ 同7丁目

高力種信の『名陽旧覧図誌』によると名古屋城下最初の本屋であるという。貞享ごろの創業で、文政期には廃業した。寛政元年(1789)にはじめて名古屋を訪れた本居宣長は、「書林藤屋吉兵衛宅」(※大平の日記では「沢のきちひやうゑ」家)に泊まったと日記に記している。



『牧民忠告解』 尾張藩国司農長府蔵板 発行：藤屋吉兵衛

天明7年(1787)刊。中国元時代の『牧民忠告』を翻訳し注釈を加えた書物で、地方へ派遣された地方官の心得などを説くもの。尾張藩参政の人見磯邑が樋口好古に編纂を指示し、藩版として刷られた。本書は藤屋吉兵衛単独で刷ったものだが、永楽屋東四郎と連名となっているものも存在する。

総合郷土研究所蔵



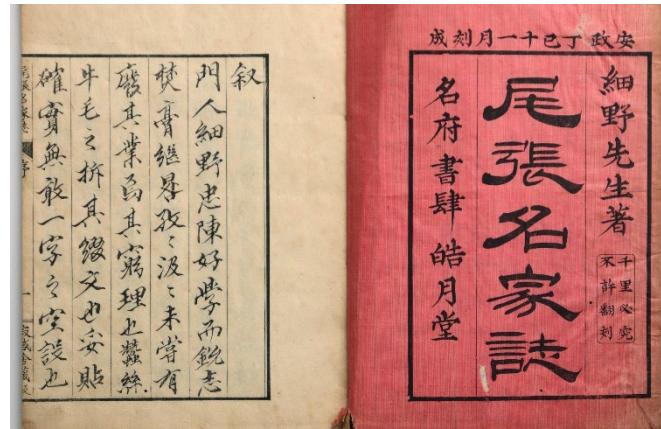
『始学猫眼』 発行：藤屋吉兵衛ほか

明和7年(1770)刊。まだ尾張での開板が認められていない時期であるため、江戸の近江屋嘉兵衛との共同出版。著者は須賀誼安。内容は朱子学を学び始める人に向けて、学問の心構えを示したもの。誼安は尾張藩士山澄氏の同心の男子で、小出侗齋、吉見幸和に師事し、閻齋学を修めた。私塾で多くの門弟を教育した業績が認められ、寛保4年(1744)に5人扶持を給され、その後8代藩主宗勝の侍講となった。

総合郷土研究所蔵

8 井筒屋文助(皓月堂)

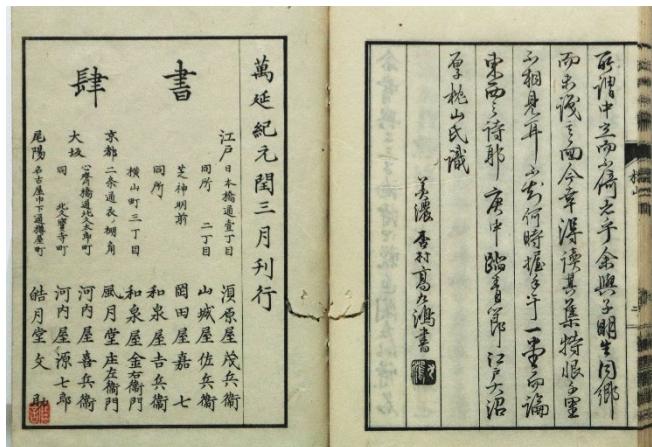
出版・古本・貸本／名古屋 大船町中橋上ル → 幅下樽屋町



『尾張名家誌』 発行：皓月堂

安政4年（1857）刊。細野要斎著。堀杏菴・秦峨眉・細井平洲・岡田新川など尾張の儒学者60名の業績を記す。版心に「寂感舎藏版」とある。細野要斎は尾張藩の藩校明倫堂の典籍職で、明治元年（1868）11月には藩主徳川義宣の侍講、翌年には明倫堂の漢学教授となる。寂感舎は要斎の号。

総合郷土研究所蔵



『耐軒詩草』 発行：皓月堂文助ほか

万延元年（1860）刊。曾我耐軒の漢詩集。耐軒は、幕末から明治時代の儒者。文化13年（1816）江戸に生まれる。昌平黌でまなび、老中水野忠邦につかえる。のち岡崎藩につかえ、明治2年（1869）同藩允文館の文学総括に就任した。

総合郷土研究所蔵

三河吉田の書林

尾張の書林については先行研究が十分になされていますが、三河の書林についてはほとんどなされておらず、詳細は明らかになっておりません。しかし、三河でも岡崎城下の本屋文吉、西尾城下の大黒屋三十郎・布袋屋仁左衛門、吉田城下の宋文堂五平・江戸屋新右衛門・大竹屋寛蔵などの商人が書林として活動していたことは書籍の奥付などから確認できます。今回はそのなかから、吉田城下の書林について紹介します。

1 石羊堂(大竹屋寛蔵) 吉田札木町

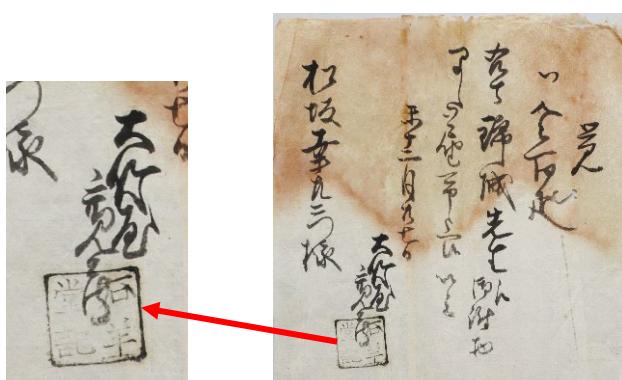
石羊堂は、小池石羊という人物で、吉田札木町に居住し、名を臣、字を国輔、通称を大竹屋寛蔵といった。吉田藩の儒者・大田錦城と親交があり、錦城は石羊について「花街柳陌中に屋敷を構え、学を好み、書を善くし、性頗る淡泊にして、また一郷の善士なり」と記している。書家・詩歌人・俳人として幅広く活躍した。書は井川叔真斎に学び、漢詩は菊池五山に師事して紀臣と号した。俳名として石羊を用いた。明和5年(1768)に生まれ、天保7年(1836)3月15日に69歳で没した。墓所は竜拈寺内の悟慶院にある。 (荒木)



『白湯集』 三河吉田 石羊堂・名古屋 東壁堂（永楽屋）

大田錦城著。文政6年(1823)刊。発行書林は三河吉田の石羊堂と名古屋の東壁堂（永楽屋東四郎）である。

綜合郷土研究所蔵



石羊堂の印

大竹屋寛蔵から松坂幸左衛門宛て、大田錦城への付け届けの通知。

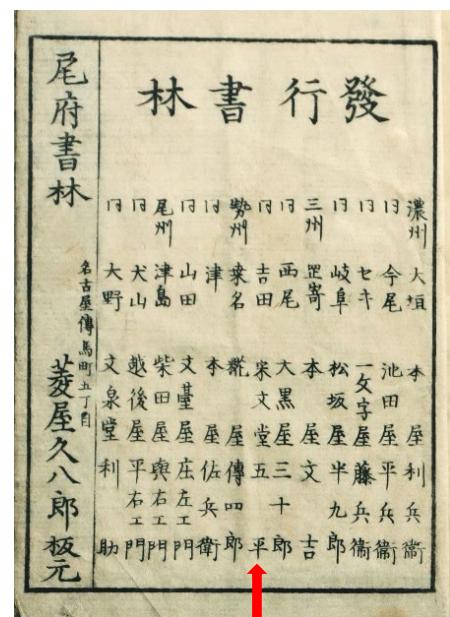
綜合郷土研究所蔵 松坂家文書

狂喜	草堂
号芳翠亭	草主
俳諧	号星井舍
漫画	名正裝
俳諧	号紅蓼園
漫画	名正裝
書	号石室
書	同居
大竹屋寛蔵	木村猪雀門
武内寛蔵	同居
鈴木可與子	田中宗助

『東海道人物志』には、武内の姓で挙げられているが誤記か。(郷土研所蔵本は復刻版)

2 宋文堂江戸屋五平

吉田本町

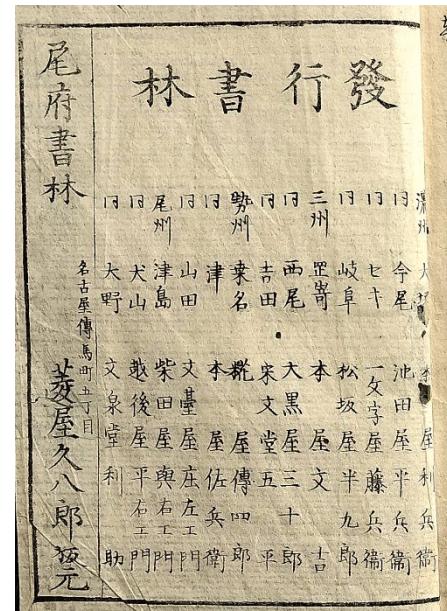
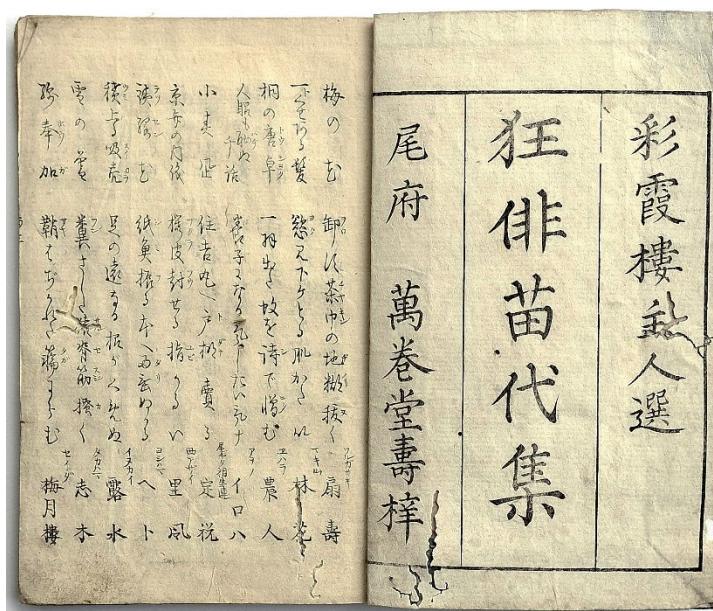


「同（三州）吉田 宋文堂五平」とある。

『くれたけ集』 蔵板：菱屋久八郎（萬巻堂） 発行：宋文堂五平含め 13 軒

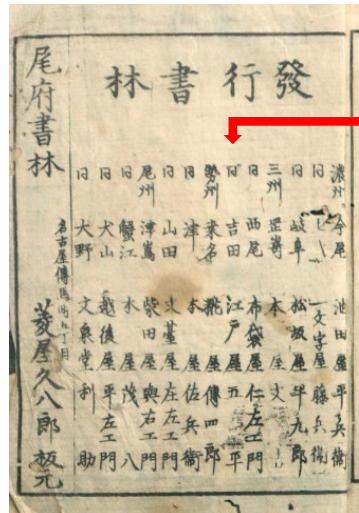
三河国加茂郡三好村の古巖斎の撰による狂俳集。本書は序文が欠けているが、岐阜市図書館所蔵本には、千秀亭柏光による安政6年（1859）の序文がある。西三河を中心として尾張・三河の俳人の名があるが、とくに西三河の俳人が多い。版元は名古屋の菱屋久八郎（萬巻堂）だが、発行書林として美濃・尾張・三河・伊勢の書林13軒が名を連ねる。

綜合鄉土研究所 榎本家文書



『狂俳苗代集』 蔵板：菱屋久八郎（萬巻堂） 発行：宋文堂五平含め 13 軒

彩霞楼主人撰。彩霞楼とは、狂俳点者で俳人の野口嶺雅のこと。岡崎横町の紺屋で通称を源助という。岡崎鱗連の中心人物。
綜合郷土研究所 榎本家文書



「同（三州）吉田江戸屋五平」とある。次に紹介する『白隱ほこりたゝき』にある朱印からも、江戸屋五平が宋文堂であることがわかる。

『狂俳たまかしわ』 蔵板：菱屋久八郎（萬卷堂）

発行：江戸屋五平含め 13 軒

千秀亭柏光の撰による狂俳集の五編。本書は序文を欠くが、『尾張狂俳の研究』によると五編は安政4年（1857）序という。2年ごとに7編刊行された。板元は菱屋久八郎。発行書林として美濃・三河・伊勢・尾張の書林13軒が名を連ねる。

総合郷土研究所蔵 榎本家文書



『白隱ほこりたゝき』 (内題：安心ほこりたゝき) 蔵板：安樂堂法儘齋

安永3年（1774）序。臨濟宗中興の祖、白隱禪師の著作。安政4年（1857）刊行。

奥付に「吉田駅本街書林 宋文堂 江戸屋五平」の朱印あり。この印により宋文堂五平と江戸屋五平が同一人物と分かる。江戸屋五平は販売店か。

総合郷土研究所蔵

江戸屋五平の印

渥美郡小浜村芳賀直の旧蔵本『初登山手習教訓書』（京都 黒屋吉兵衛蔵板）に「書林 吉田本町 江戸屋五平」の印がある。

総合郷土研究所蔵 芳賀家文書



3 江戸屋新右衛門

吉田本町か

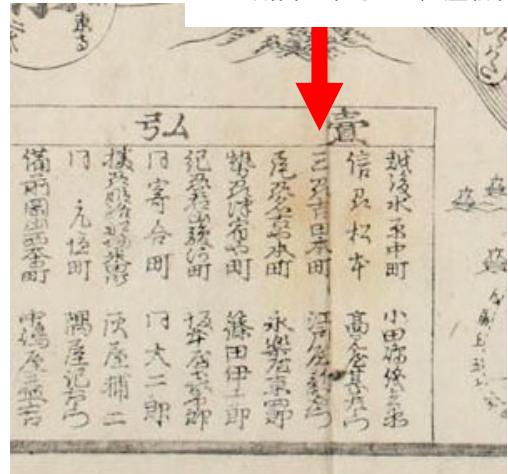
吉田の江戸屋新右衛門といえば、札木町の本陣職で飛脚業を営なむ山田新右衛門が思い浮かびます。しかしここに紹介する『浪花講定宿附』には札木町ではなく本町と記されています。本町としているのが誤りなのか、あるいは移転したのか、はたまた両方の町に屋敷や店があったのか、詳細は明らかではありません。

『浪花講定宿附』

「壳弘書林」のひとつに三河吉田宿の江戸屋新右衛門の名が載る。刊行年不詳。

画像：関西大学鬼洞文庫一枚摺データベース

「三州吉田本町 江戸屋新右衛門」

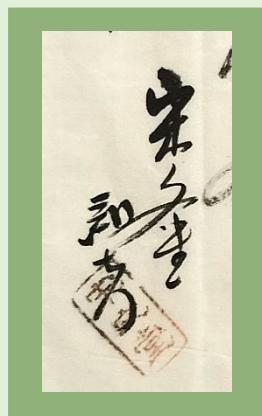


もう一つのなぞ

江戸屋新右衛門は宋文堂か

江戸屋五平（宋文堂）と江戸屋新右衛門は、同じ屋号を掲げています。彼らは親類関係なのか、また新右衛門も“宋文堂”を名乗っていたのか、なぞは深まるも決定打となる資料はありません。展覧会も一息つき、松坂家文書の整理をしていると、一枚の史料が目に留まりました。書籍購入の領収書で、差出人は「宋文堂新右衛門」、印影は「宋文堂」です。なんとも惜しい。どこにも「江戸屋」の三文字がありません。これでは江戸屋新右衛門が宋文堂だったとは言えません。この先、宋文堂新右衛門＝江戸屋新右衛門を証明できる資料の発見を俟ちたいものです。

「宋文堂 新右衛門」とあり、
「宋文堂」の印が捺される。



綜合郷土研究所蔵 松坂家文書

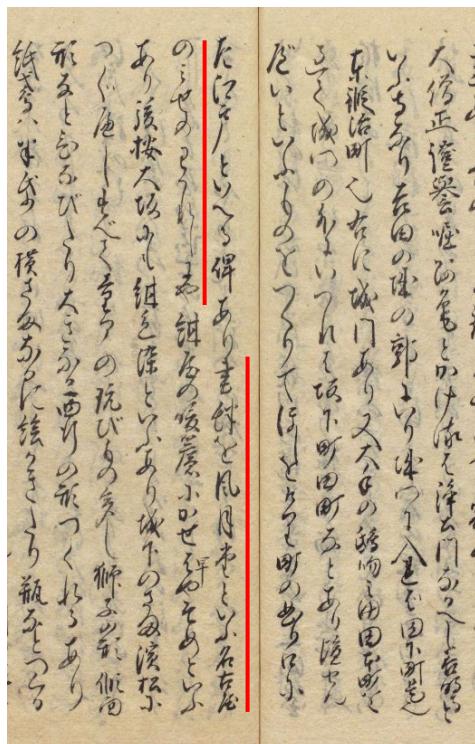
(荒木)

4 風月喜兵衛

吉田吳服町

明和 5 年 (1768) 刊の『閑居放言』の 7 軒の書林のうちに「参州吉田 風月喜兵衛」の名前がみられます。また明和 6 年刊行の『奉納伊勢国能褒野日本武尊神陵請華篇』には「三河吉田吳服町 風月喜兵衛」と記され、吳服町に所在したことが明らかとなっています。さらに享和元年(1801)に江戸から大坂に下った大田南畠の『改元紀行』に「書肆を風月堂といふ、名古屋のみせのわかれしにや」として登場することから、このころまでは書林として商いをしていたことが明らかです。

(橋)



大田南畠『改元紀行』

(画像出典：国立公文書館デジタルアーカイブ)

5 吐玉堂



『参河国官社私考略』 楠園（羽田野敬雄）蔵版 名古屋 皓月堂・三河吉田 吐玉堂

天保 13 年 (1842) 序。羽田野敬雄著。延喜式神名帳および三河国神名帳に載る三河国内の官社鎮座地についての考証書。序文は中山美石による。200 葉餘ある稿本『三河国官社私考』を上梓のため略本としたもの。

綜合郷土研究所蔵

東三河の読書熱を支える — 夏目可敬を例に —

『三河名所図会』を編述した夏目可敬は、吉田の上伝馬町で鉄物屋を営む商人でした。羽田村にある寺院の日記『淨慈院日別雜記』には、名前の平次郎、商売と名前を短縮した鉄平として登場します。淨慈院は平次郎の得意先で、日常的に取引がありました。文政2年(1819)9月22日、住職が平次郎方で位牌を銭168文で購入した折には、『吉野往来』1冊を銭190文で入手しています。同12年(1829)正月11日に弟子が平次郎方で『唐詩選』等の古本を借りています。古本類は同月14日に返却されますが、『唐詩選』は半蔵が銭200文で購入し、読物としました。文政12年8月12・17日の記事によれば、平次郎は『秋の寝覚』『古今集』『新古今集』『雅言かなつかい』『古言梯』『竹紙草庵』を淨慈院の弟子に貸し出しています。平次郎は蔵書家として知られ、得意先の要望にこたえたのでしょう。ただし、本業のほかに、貸本屋を兼業していたとまでは、断定できません。しかし、吉田の読書熱を支える存在であったことは確実です。『三河名所図会』全11巻は、安政3年(1856)5月2日に吉田藩主の閲覧を得ました。

(橋)

【おもな参考文献】

- ・朝倉治彦、大和博幸編『近世地方出版の研究』東京堂出版 1993年
- ・熱田神宮宮庁『熱田神宮史料 縁起由緒続編(一)』2006年
- ・伊奈森太郎『隠れたる先覚者三宅友信』1935年10月再訂版
- ・井上隆明『近世書林板元総覧』青裳堂書店 1998年
- ・井上善雄『大田錦城伝考 下』加賀市文化財専門委員会 1973年
- ・笠井助治『近世藩校に於ける出版所の研究』吉川弘文館 1962年
- ・岸雅裕『尾張の書林と出版』青裳堂書店 1999年
- ・岸得蔵「栗杖亭鬼卵の生涯」『静岡女子短期大学 紀要 第8号』1962年
- ・岸野俊彦「新発見の書状から見た、本居宣長と長井千秋」『名古屋芸術大学研究紀要 第32巻』2011年
- ・岸野俊彦「近世名古屋書肆の営業展開」『名古屋芸術大学研究紀要 第33巻』2012年
- ・芥子川律治『名古屋方言の研究』泰文堂 1971年
- ・近藤恒次『三河文献総覧』豊橋文化協会 1954年
- ・高田宗平編『日本漢籍受容史』八木書店 2022年
- ・豊橋市図書館『豊橋市図書館所蔵拓本資料集 豊田珍比古氏旧蔵資料』2017年
- ・田原町文化財調査会『田原町史 中巻』田原町教育委員会 1975年
- ・名古屋市博物館『名古屋の出版 江戸時代の本屋さん』1981年
- ・名古屋市役所『名古屋市史 人物編第一・第二』1934年 愛知県郷土資料刊行会による復刻版 1980年
- ・橋口侯之介『続和本入門』平凡社 2007年
- ・本居宣長記念館『宣長の版本』2014年
- ・東三河文化人名事典編輯委員会編著『近世近代東三河文化人名事典』未刊国文資料刊行会 2015年
- ・山田研治「『鈴林必携・上巻』卷頭「泰西尺度量衡」と『ミリタイレサックブック』:尺度を中心に」『計量史研究34(1)』日本計量史学会 2012年. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/10632251>
- ・吉田俊英『尾張の絵画史研究』清文堂 2008年

「近世の本—尾張と三河の書林」

公開日 2026年1月6日

編集 愛知大学総合郷土研究所